

2008
特別展

激動の7世紀

— 御所ヶ谷神籠石とその時代 —

■ 平成20年9月17日～10月16日



主催 / 行橋市教育委員会・(財)行橋市文化振興公社

ごあいさつ

豊前海に沿って発達した地域は、古くは「豊国」とよばれていました。京都平野はこの国の中心で、早くから畿内政権と結ばれた陸海の交通の要衝として発展してきました。また、国内だけでなく、関門海峡を通じて中国や朝鮮半島に向かう外交の門戸として重要な役割を担っていました。

7世紀を迎えると、唐の律令体制を学んだ日本は、急速に中央集権的な古代国家へと発展していきます。仏教を中心とした数多くの渡来系文化が伝来するとともに、中国や朝鮮半島の政情変化の影響も強く受けることとなりました。

特に7世紀後半には、唐と連合した新羅の発展とその脅威が日増しに強くなり、国際緊張が続きしました。百済救援のために唐・新羅の連合軍と戦った白村江の敗戦を機に、新羅の南下に備えて国防が強化され、大宰府の水城と大野城が築城されています。

この緊迫した時代に、市内の御所ヶ谷神籠石をはじめとして、西日本各地に山城や神籠石が造られています。

今回の特別展では、行橋市で開催される「第3回神籠石サミット」にあわせて、国指定史跡である「御所ヶ谷神籠石」を題材とし、京築地方を舞台に繰り広げられた激動する7世紀の古代史を紹介します。

この特別展を通して、市民の文化財への関心と郷土の文化財保護意識が高まることを期待しています。

最後になりましたが、このたびの特別展を開催するにあたり、多くの方々のご協力とご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。

平成20年9月17日

行橋市教育委員会

(財)行橋市文化振興公社

目次

御所ヶ谷神籠石とその時代・・・・・・・・・・	1	〔4〕建物・貯水池・石切場・・・・・・・・・・	17
7世紀の京築地方・・・・・・・・・・	2～5	〔5〕御所ヶ谷のその他の史跡・・・・・・・・・・	18
神籠石とは何？・・・・・・・・・・	6	〔6〕御所ヶ谷の自然・・・・・・・・・・	19
日本の古代山城・・・・・・・・・・	7～8	唐原山城跡・・・・・・・・・・	20～22
御所ヶ谷神籠石・・・・・・・・・・	9	神籠石が造られた時代とその背景・・	23～24
〔1〕研究史・・・・・・・・・・	10	御所ヶ谷神籠石の今後・アクセス・・	25
〔2〕城壁—土塁と石塁—・・・・・・・・・・	11～12	出品目録・・・・・・・・・・	26～27
〔3〕城門・・・・・・・・・・	13～16	参考文献・・・・・・・・・・	28

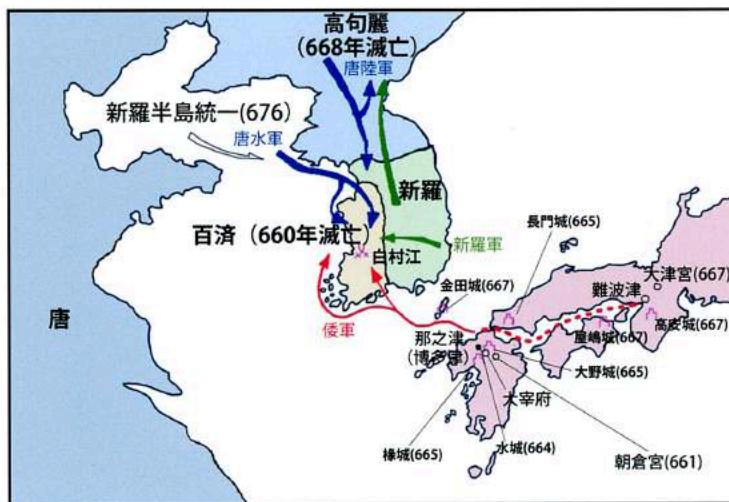
例言

- 1、本書は平成20年9月17日から10月16日まで行橋市歴史資料館で開催する平成20年度特別展「激動の7世紀—御所ヶ谷神籠石とその時代—」の展示図録です。
- 2、行橋市歴史資料館で行いました。
- 3、開催にあたり、数多くの方々のご協力を得ました。巻末に記して厚く感謝いたします。

御所ヶ谷神籠石とその時代

7世紀を中心とした飛鳥時代は、地方の豪族たちから天皇（大王）に次第に支配権が集中し、倭から日本という国家体制が形成されていく激動の時代でした。当時の都の多くは飛鳥地方にありましたが、二度ほど飛鳥を離れたことがあります。孝徳天皇の難波長柄豊碕宮（10年間）と天智天皇の近江大津京（5年間）の合計15年足らずの間です。

難波長柄豊碕宮は、蘇我氏らの旧豪族の拠点を避けて遷都した宮で、この宮を舞台に唐にならった律令国家が次第に形成されていきました。一方、近江大津京への遷都は、朝鮮半島を巡る国防上の理由から初めて畿内を離れた異例の都でした。660年、倭と友好関係にあった百済が唐・新羅連合軍に滅ぼされました。百済の遺臣の求めに応じて齊明天皇は救援



7世紀後半の東アジア 白村江の戦い関係図

の兵を朝鮮半島に送ります。翌年、天皇は筑紫の朝倉橘広庭宮で崩御しましたが、母である齊明天皇の遺志を継いだ中大兄皇子は即位式を挙げる間もなく皇太子のままで指揮を執り、百済救援の軍を朝鮮半島に派遣しました。

しかし、663年8月、倭軍は白村江（現在の韓国錦江河口）で唐・新羅連合軍に大敗しました。このため唐・新羅侵攻の脅威にさらされ、国防強化策として百済遺臣の協力を得て「朝鮮式山城」があわただしく造られています。白村江の敗戦は、それまでわが国が体験したことのない国防への危機感を募らせたことと思われます。

『日本書紀』によれば、664年に対馬、壱岐、筑紫などに防と烽が置かれ、筑紫に水城を築き、665年には長門城、筑紫国に大野及び椽（基肄）の2城、さらに667年には大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城が築かれています。

文献史料にはみられません。西日本で確認されている16ヶ所の神籠石（神籠石系山城）もこの頃に築かれた古代山城といわれています。古代山城の築城や海から遠く離れた内陸の近江大津京に遷都した理由もこのような国際緊張が背景にあるようです。

朝鮮半島では、668年に唐と連合して高句麗を滅ぼした新羅の勢力が強まり、676年には半島から唐の勢力をも追い出して朝鮮半島の統一を成し遂げました。唐と国境を接した段階から新羅は外交方針を転換し、668年から日本への朝貢を再開しています。日本からも670年に新羅に使節が派遣され、友好関係が戻り国防の危機感が遠のきました。

国内では、天智天皇（中大兄皇子）の死後、672年に壬申の乱が起こり、勝利した天武天皇（大海人皇子）を中心に唐にならった律令体制を柱とした本格的な中央集権国家がつくられます。

この頃、それまでの古墳文化が終わりを告げ、新時代の到来を告げる仏教文化が開花しました。6世紀までは畿内中心だった仏教文化は、7世紀後半には各地に広がり、ここ京築地方でも古代寺院が建立されています。豪族の権威の象徴は、古墳から寺院へと変遷しました。

7世紀の京築地方

終末期古墳の時代

3世紀後半から7世紀末まで約450年間を古墳時代といいます。この時代を象徴する前方後円墳は大王を頂点とする首長たちの墳墓として採用されましたが、6世紀後半には全国で前方後円墳の築造が終わり、^{はくそう}薄葬の風習が広がりました。この時代に造られた古墳を終末期古墳と呼んでいます。

京築地方でも^{はやとづか}隼人塚古墳（行橋市・39m）を最後に前方後円墳の築造が終わり、首長墓は大型の方墳、円墳に変わっていきます。京都平野では北^{みやこ}の京都郡域に^{たちばなづか}橋塚古墳（みやこ町・方墳40×38m）、^{あやづか}綾塚古墳（同・円墳41m）、^{うらやま}願光寺裏山古墳（行橋市・方墳？15m）などの大型墳が築造されました。南の仲津郡域は古代に国府が置かれ、豊前国の中心地域となりますが、^{かぶとづか}甲塚方墳（同・47×36m）、^{けん どころかぶとづか}彦徳甲塚古墳（同・円墳29m）など豊国造の墓と考えられる大型墳が確認されています。一方、南部では山国川北岸の^{こうげ}上毛郡域で大型墳が見られます。なかでも^{あな は やま}穴ヶ葉山1号墳（上毛町・円墳23m）は京築地方でも珍しい線刻をもつ装飾古墳として注目されます。



綾塚古墳



願光寺裏山古墳



甲塚方墳



須恵器子持壺 穴ヶ葉山1号墳



穴ヶ葉山古墳群全景（中央は1号墳）

首長墳ではない一般民衆クラスの墓は特定の墓域に密集して造られる傾向があり、「群集墳」と呼ばれています。群集墳は6世紀後半頃に全盛を極め、首長墳同様に7世紀には減少傾向にありますが、京築地方では古墳時代終末期に入っても営まれ続けました。

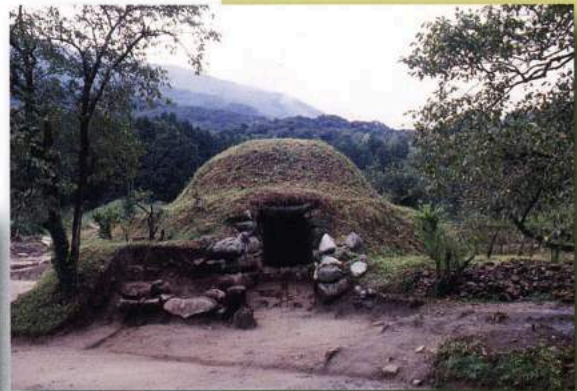
京都平野では福丸古墳群（行橋市・48基）や渡築紫古墳群（同・29基）、稲童豊後塚古墳群A群（同・17基）、御手水原古墳群（みやこ町・13基）などがあります。



渡築紫古墳群



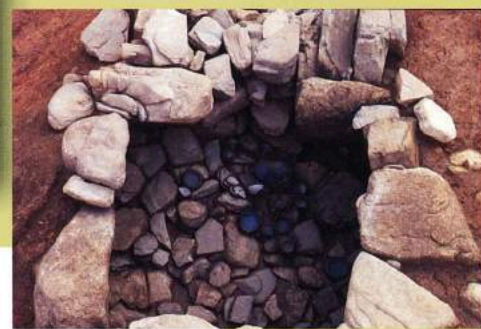
御手水原古墳群



福丸1号墳



稲童豊後塚古墳群A群



御手水原6号墳

中部の旧築城郡域では安永古墳群（築上町・4基）、石堂中後ヶ谷古墳群（同・16基）、菜切古墳群（同・7基）、頭無古墳群（同・1基以上）、黒部古墳群（豊前市・7基）、黒峰尾古墳群（同・11基）、南部の山国川北岸でも先述の穴ヶ葉山1号墳が属す穴ヶ葉山古墳群（上毛町・現存4基）、金居塚古墳群（同・20基以上）、恵良古墳群（同・5基以上）などが営まれていました。



石堂中後ヶ谷古墳群

古墳から寺院へ

わが国には 538 年に朝鮮半島の百済から仏教が伝わり、7 世紀にかけてその文化が畿内から地方に広がっていきます。京築地方にも 7 世紀後半頃には仏教文化が波及し、豪族の権威の象徴を示すモニュメントは、巨大な古墳から寺院へと変化していきました。

北部の京都平野では北に椿市^{つばきいちはいじ}廃寺（行橋市）、南に上坂^{かみさか}廃寺（みやこ町）・木山^{きやま}廃寺（同）が 7 世紀末頃に建立されました。創建の際にはいずれの寺院も蓮華文^{れんげ}をデザインした「百済系瓦」を屋根に葺きました。最も発掘調査が進んでいる椿市廃寺は、講堂・金堂・塔が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍^{がらん}配置を採るものと推定され、軒丸瓦 5 種、軒平瓦 2 種、鴟尾瓦^{しび}などの瓦類、塑像^{そざう}螺髪^{らぼう}、木簡^{もっかん}、奈良三彩陶器など豊富な遺物が出土しています。



椿市廃寺全景



椿市廃寺塔心礎



上坂廃寺塔心礎



木山廃寺塔心礎（石碑に転用）

中部の旧築城郡域ではまだ古代寺院は見つかっていませんが、南部の上毛郡域では垂水^{たるみ}廃寺（上毛町）があります。軒先瓦に華麗な唐草文様を配したいわゆる「新羅系瓦」を出土する寺院として著名です。創建期には京都平野の 3 寺院と同様に百済系瓦を使用しますが、3 寺院の瓦よりはやや古い様相を示しており、垂水廃寺は京築地方で最も古い寺院と考えられています。



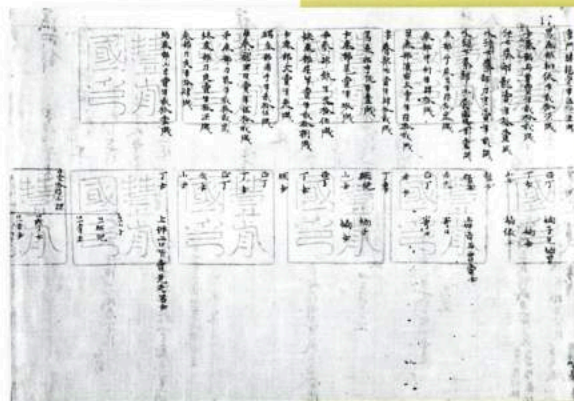
垂水廃寺 軒先瓦

人々の暮らし

この頃の京築地方の人々を理解する上で重要な史料があります。正倉院に残された戸籍断簡^{だんかん}です。8世紀初頭(702年)のもので、仲津郡^{てい}「丁里」(みやこ町?)、上三毛郡^{かみつみ}(上毛郡)「塔里」(上毛町唐原)、同「加自久也里」(豊前市大村・八屋)のものが残っています。戸籍からは秦部や勝姓など渡来系の人々が多く住んでいたことが分かり、この地方の特徴である渡来系考古資料の多さはそれを裏付けています。

この時期の集落は6世紀後半頃から継続して営まれるものが多く、北部の京都平野では渡築紫遺跡B・C区(行橋市)^{いなどうのねざこ}、稲童野稲迫遺跡(同)、南部では荒堀中ノ原遺跡^{あらほり}(豊前市)などの発掘調査が行われています。渡築紫遺跡C区では23軒の方形竪穴住居と約10棟の掘立柱建物が見つかりました。人々の生業は専ら水田・畑作農耕であったと考えられますが、この地方では豊前海で採れる魚介類も貴重な栄養源でした。

また特殊な産業も行われていました。船迫窯跡群^{ふなさこ}(築上町)では奈良時代にかけて瓦や土器を生産しています。山田窯跡群(上毛町)なども規模は小さいながらも同様の遺跡です。松丸F遺跡(築上町)では製鉄を行った炉跡や木炭窯(6基)も確認されています。窯業も製鉄業も当時としては高度な技術を有し、いずれも先に触れた渡来系住民の関与が考えられます。7世紀の京築地方は先進地域でした。



大宝二年豊前国仲津郡丁里の戸籍帳



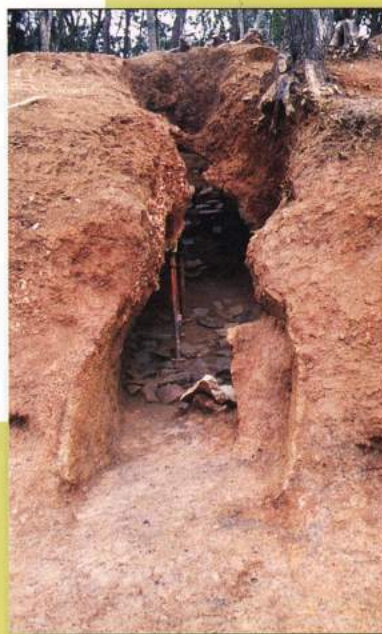
渡築紫遺跡C区



松丸F遺跡



百濟系軒丸瓦
船迫窯跡群



船迫堂がへり2号窯跡

神籠石とは何？

「神が籠もる石」と書いて神籠石。とても謎めいた名前の遺跡ですが、日本の考古学会で広くその名が知られるようになったのは明治 30 年代初めのことでした。小林庄次郎が高良山（福岡県久留米市）の山腹をめぐる列石遺構を神籠石として紹介したのがきっかけです。

その後、昭和初期まで神籠石の性格をめぐる「神籠石論争」が起こります。神籠石が文字通り神聖な場所を示している「霊域（神域）説」と山城の城壁跡とする「山城説」が対立しました。当時の歴史雑誌『歴史地理』などで特集が組まれるほどこの論争は沸き、終止符が打たれるのは戦後の発掘調査を待たなければなりませんでした。

1963 年、おつぼ山神籠石（佐賀県武雄市）、石城山神籠石（山口県光市）の発掘調査が行われ、列石が土塁（土の城壁）の基礎石であることが分かりました。また列石の前面には土塁を築くための支柱穴もみつき、神籠石が山城跡であることが分かりました。

その後、神籠石の造られた年代やその目的、誰が造ったのか等が議論されていますが、7 世紀頃に造られた古代山城であること以外にまだ定説はありません。



『歴史地理』神籠石号



石城山神籠石調査風景
(1963 年)



帯隈山神籠石 列石と柱穴列

コラム 1 高良山の神籠石

福岡県久留米市の高良山には式内社の高良大社が鎮座しています。その参道脇に「馬蹄石」と呼ばれる大石があります。古く鎌倉時代に記された『高良玉垂宮縁起』にある「神籠石」はこの馬蹄石のことで、高良の神が神馬の蹄の跡を残されたという伝承をもつ磐座として崇められてきました。

1898 年、小林庄次郎が高良山中をめぐる列石（「八葉の石畳」と呼ばれています）を誤って「神籠石」と紹介したことから、今では同様の遺跡を神籠石と呼ぶようになりました。



高良大社 本殿拝殿



馬蹄石

日本の古代山城

朝鮮式山城

7世紀の東アジアは動乱の時代で、当時の日本（倭）もその影響を受けました。663年の白村江の戦いで、倭は大敗し、国外から侵攻されるのではないかとという危機感が募ります。664年には大宰府で水城が築堤され、665年には大野城や基肄城、667年には金田城などが築かれます。築城には百済の亡命官人が関わったことが『日本書紀』などに記されています。これらの山城は、朝鮮半島の技術で造られた城であることから「朝鮮式山城」と呼ばれています。



大宰府全景



大野城 百間石垣



鞠智城全景

西暦	記事内容	出典
	狭穂原、稲を積みて城を作る。これを稲城という。火を放ち、その城を焼く	『日本書紀』垂仁五年
	稲城を焼けて待ちて戦う	『日本書紀』雄略一四年
587年	稲城を築きて戦う	『日本書紀』崇峻即位前記
644年	家の外に城柵を作り、門の傍らに兵庫をつくる	『日本書紀』皇極三年
645年	法興寺に入り、城となして備える	『日本書紀』皇極四年
647年	浮足磯を造り、櫓戸を置く	『日本書紀』孝德三年
648年	磐舟橋を治す	『日本書紀』孝德四年
658年	都岐沙羅の櫓道に位二階を置く	『日本書紀』斉明四年
660年	唐懐おのが櫓によりて戦う	『日本書紀』斉明六年
664年	対馬前・巻岐前・筑紫国などに防と柵を置く。筑紫に水城を築く	『日本書紀』天智三年
665年	長門国に築城。筑紫国に大野・穂の二城を築く	『日本書紀』天智四年
667年	倭国に高安城、讃吉国に厚崎城、対馬国に金田城を築く	『日本書紀』天智六年
669年	高安城の工事を中止する	『日本書紀』天智八年八月
同 年	高安城を修理し、畿内の田税を収める	『日本書紀』天智八年冬
670年	高安城を修理し、殿・壘を貯え、長門に一城、筑紫に二城を築く	『日本書紀』天智九年
672年	筑紫大宰、筑紫国の城を高く堀を深くして外柵に備える	『日本書紀』天武元年六月
同 年	三尾城を攻め落とす	『日本書紀』天武元年七月
同 年	高安城の税金が焼失する七月	『日本書紀』天武元年
676年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』天武四年
680年	龜田山、大坂山に閉おき、難波に城を築く	『日本書紀』天武八年
689年	筑紫に位記(群命)を送り、新城を視察させる	『日本書紀』持統三年八月
同 年	天皇、高安城に幸す	『日本書紀』持統三年十月
698年	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を修理させる	『続日本紀』文武二年五月
同 年	高安城を修理する	『続日本紀』文武二年八月
699年	高安城を修理する	『続日本紀』文武三年九月
同 年	大宰府に三野・稲積の二城を修理させる	『続日本紀』文武三年十二月
701年	高安城を廃する	『続日本紀』大宝元年
712年	河内国高安の柵を壊し、高見の柵と大倭国に春日の柵をおく	『続日本紀』和銅五年正月
同 年	高安城に行幸する	『続日本紀』和銅五年八月
719年	備後国安那郡の茨城、厚田郡の常城を停廃する	『続日本紀』養老三年
756年	佐土城を築く	『続日本紀』天平勝宝八年
772年	筑紫国大津城監を罷む	『続日本紀』宝龜三年

古代山城関連記事

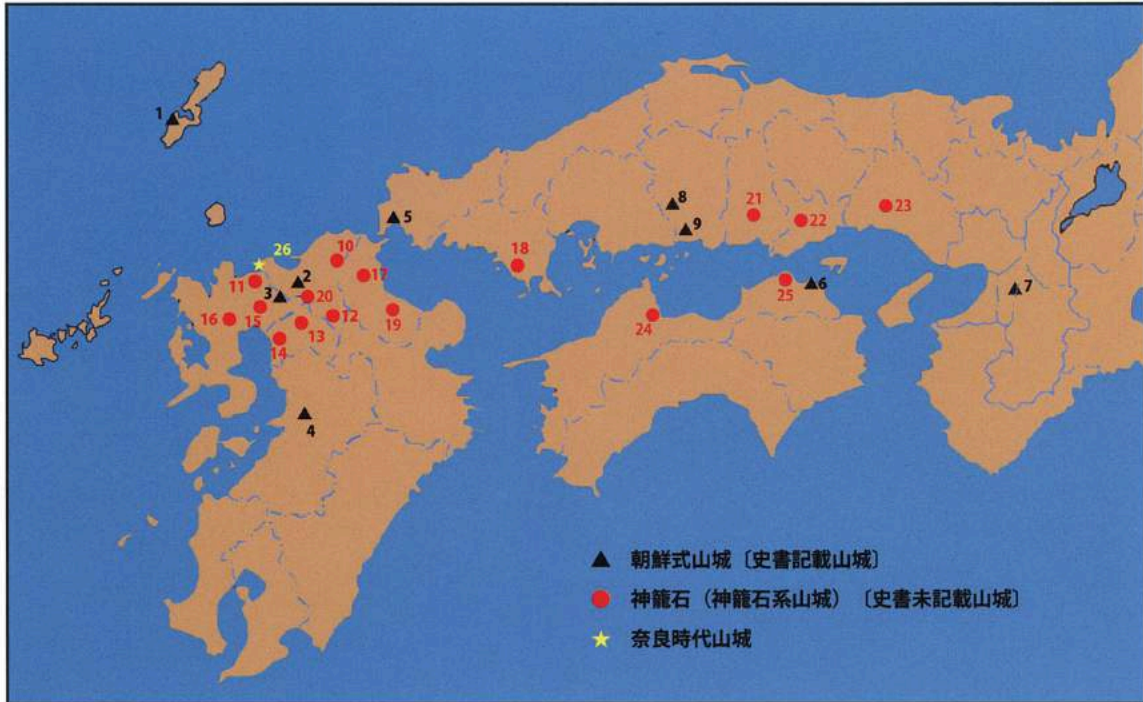


金田城 南門

神籠石（神籠石系山城）

神籠石も朝鮮式山城とほぼ同時期に造られたとされる山城ですが、文献史料に築城記録が見られないため、誰が、いつ、何のために造ったかは明らかになっていません。

朝鮮式山城と神籠石（神籠石系山城）は全国で 20 数ヶ所が知られており、北部九州を中心に、瀬戸内沿岸と当時の都が置かれた大和に至るルートに点々と築られました。



朝鮮式山城

日本の古代山城の分布図

1. 金田城 2. 大野城 3. 基肆城 4. 鞠智城 5. 長門城 6. 屋嶋城 7. 高安城 8. 常城 9. 茨城

神籠石（神籠石系山城）

10. 鹿毛馬神籠石 11. 雷山神籠石 12. 杷木神籠石 13. 高良山神籠石 14. 女山神籠石 15. 帯隈山神籠石
 16. おつぼ山神籠石 17. 御所ヶ谷神籠石 18. 石城山神籠石 19. 唐原山城 20. 阿志岐山城 21. 鬼ノ城
 22. 大廻小廻山城 23. 播磨城山城 24. 永納山城 25. 讃岐城山城

奈良時代山城

26. 怡土城



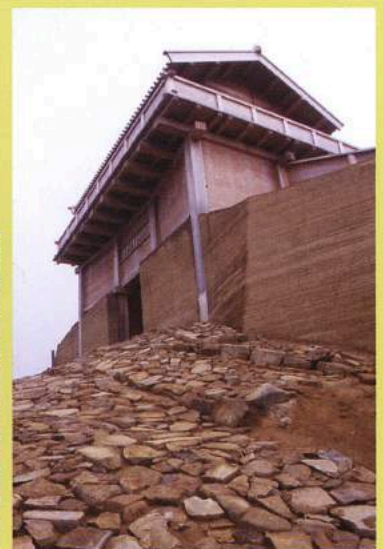
石城山神籠石
東水門



高良山神籠石 列石



雷山神籠石 北水門



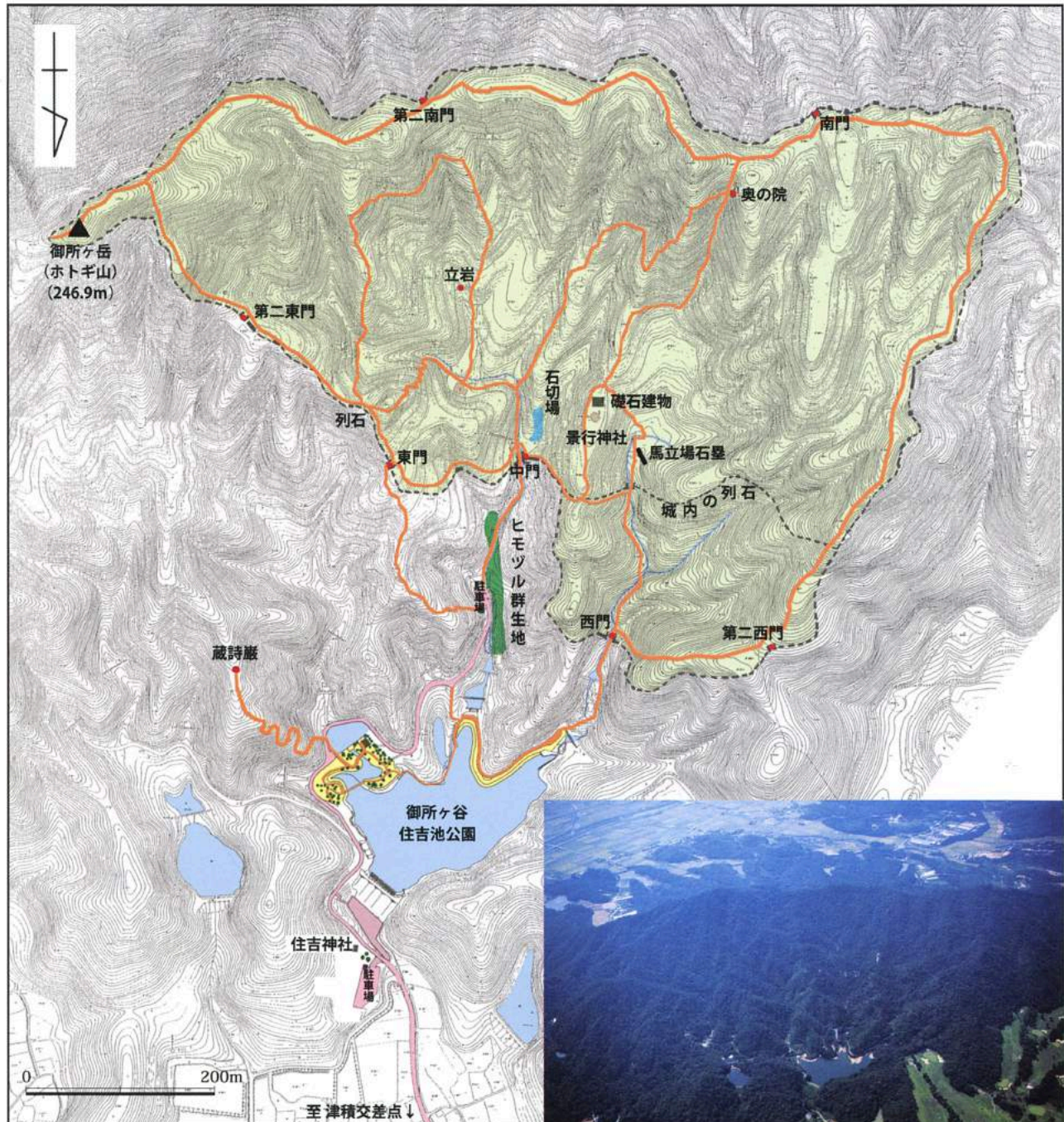
鬼ノ城 西門

御所ヶ谷神籠石

御所ヶ谷神籠石は行橋市津積^{つつみ}、みやこ町勝山大久保、みやこ町犀川木山^{さいがわ}にわたって広がる古代の山城です。国史跡に指定されています。246.9mの御所ヶ岳（ホトギ山）から西にのびる尾根の主に北斜面に広がり、城壁は土で造られた土塁を中心に約3kmに及びます。

城壁が谷を渡る部分には排水溝を備えた石塁が築かれます。城門は7ヶ所確認されており、城内から礎石建物跡や貯水池、石切場なども見つかっています。

山頂からは、京都平野を一望することができ、東にある中世山城の馬ヶ岳^{うま たけ}城跡と共にトレッキングコースとしても親しまれています。



御所ヶ谷神籠石地形図



御所ヶ谷神籠石全景

〔1〕 研究史

御所ヶ谷神籠石のことが知られるようになったのは江戸時代のことです。福岡藩の国学者・貝原益軒は、『豊国紀行』の中で御所ヶ谷山中にある石塁や礎石建物跡などに触れ、『日本書紀』に見られる景行天皇の熊襲征伐時の行宮(仮の御所)と考えました。その後、伊藤常足(『太宰管内志』)、西田直養(『柳村雑記』『筱舎漫筆』)、渡邊重春(『豊前志』)らがこの遺跡について触れています。このことはこの地が「御所ヶ谷」と呼ばれる由縁になったと思われま

す。1898年に高良山神籠石が学会に周知され、「神籠石論争」が起こる中で御所ヶ谷神籠石も注目されるようになります。その端緒になったのが1908年の伊東尾四郎の報告です。伊東は『豊前志』の「御所ヶ谷」条の記録を頼りに調査を行い、列石の存在を確認しました。昭和初期には稗田村教育委員会(現行橋市教育委員会)が文化財指定申請のための遺構実測調査を行い、戦後1953年に国史跡に指定されました。

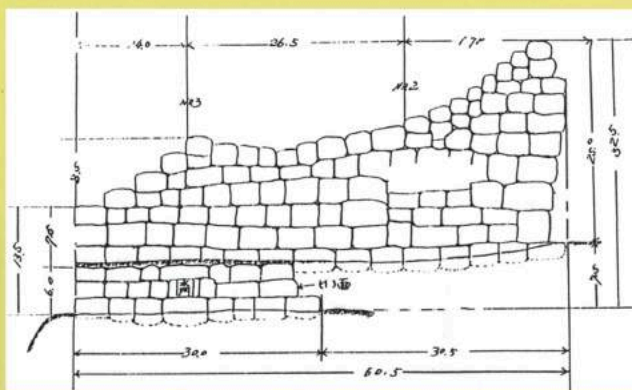
おつぼ山神籠石などの発掘調査を経て、神籠石が山城と認められてからは、郷土史家の定村責二、石田孝、吉武芳彦らによる遺構確認が行われ、近年にかけては向井一雄による城門跡の発見などがあります。そして、1993年からは行橋市による発掘調査が開始され、徐々に御所ヶ谷神籠石の様相が明らかになりつつあります。



昭和初期の御所ヶ谷神籠石



外郭線の調査(平成5年度)



中門測量図(1933年稗田村教委作成)



第二東門の崩落石材の撤去(平成5年度)

〔2〕 城壁 — 土塁と石塁 —

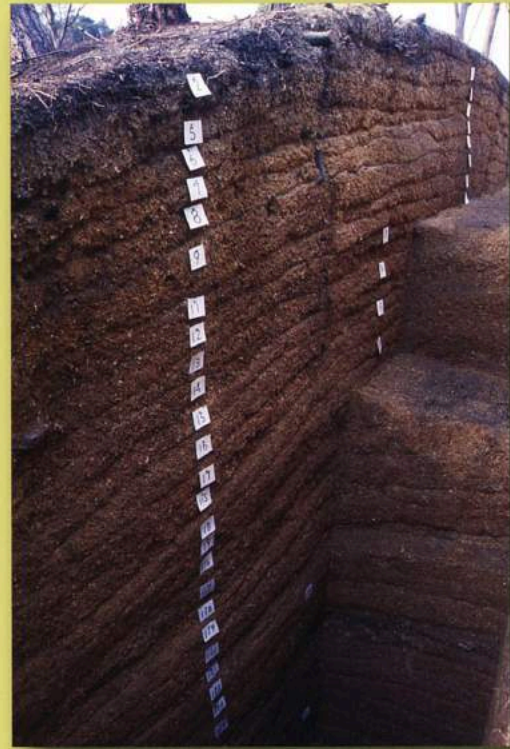
土塁

神籠石の土塁は、朝鮮半島から伝わった版築^{はんちく}という技術で造られています。版築とは、堰板^{せきいた}を用い、砂と土を一層ごと突き棒で突き固めながら積み上げていく工法です。御所ヶ谷神籠石の版築は積み上げられた土の層が70～80層に及びます。九州の多くの神籠石の土塁が高さ2～3mであるのに対し、御所ヶ谷では4.5～4.8mとかなり高い城壁が造られていたことが分かっています。土塁の基底部には、土留めや土塁を水から守る機能をもつ列石^{かこうがん}(花崗岩製)が敷かれています。

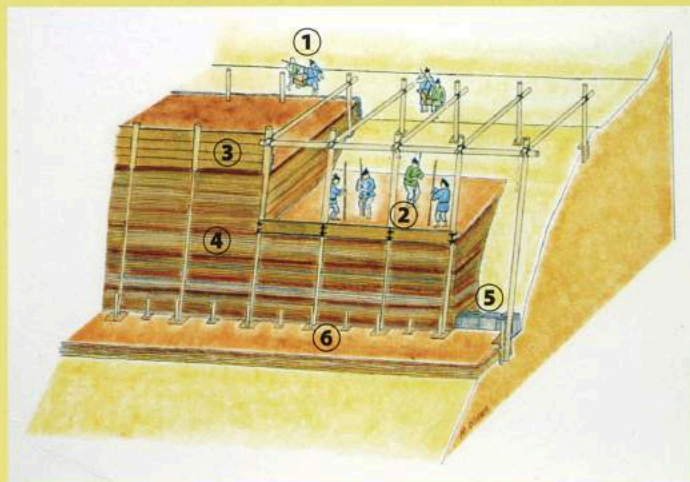
一方、列石を全く使わずに築かれた版築土塁は、外郭線の北西部分で確認されています。列石を使用しなくても、高さ4.5mの土塁を築くことは可能でした。御所ヶ谷神籠石のなかでは土だけで築かれた土塁は、列石を用いた土塁より少し遅れて築かれたようです。



列石と版築土塁（手前は支柱穴）



土塁の版築状況



土塁築造の推定図

- ① 土を運ぶ
- ② 突き棒で土を叩いて固める
- ③ 土留め用の板（堰板）
- ④ 版築土層
- ⑤ 版築土に包まれた列石
- ⑥ 支柱列

石塁

城壁が谷を通る部分は、土塁ではなく石を積んだ石塁で造られています。中門、西門の両側壁も石塁です。谷部は水が流れることから、崩壊を防ぐため石を用いて築いたと考えられています。

中門と東門を結ぶ外郭線の中間にある小さな谷に築かれた石塁です。



東石塁（中門・東門の間）

中門の水門と反対側、東側にある石塁です。崩れた部分では裏込めの石材が確認できます。



中門 東石塁

第二東門の東約 20mに残る石塁です。

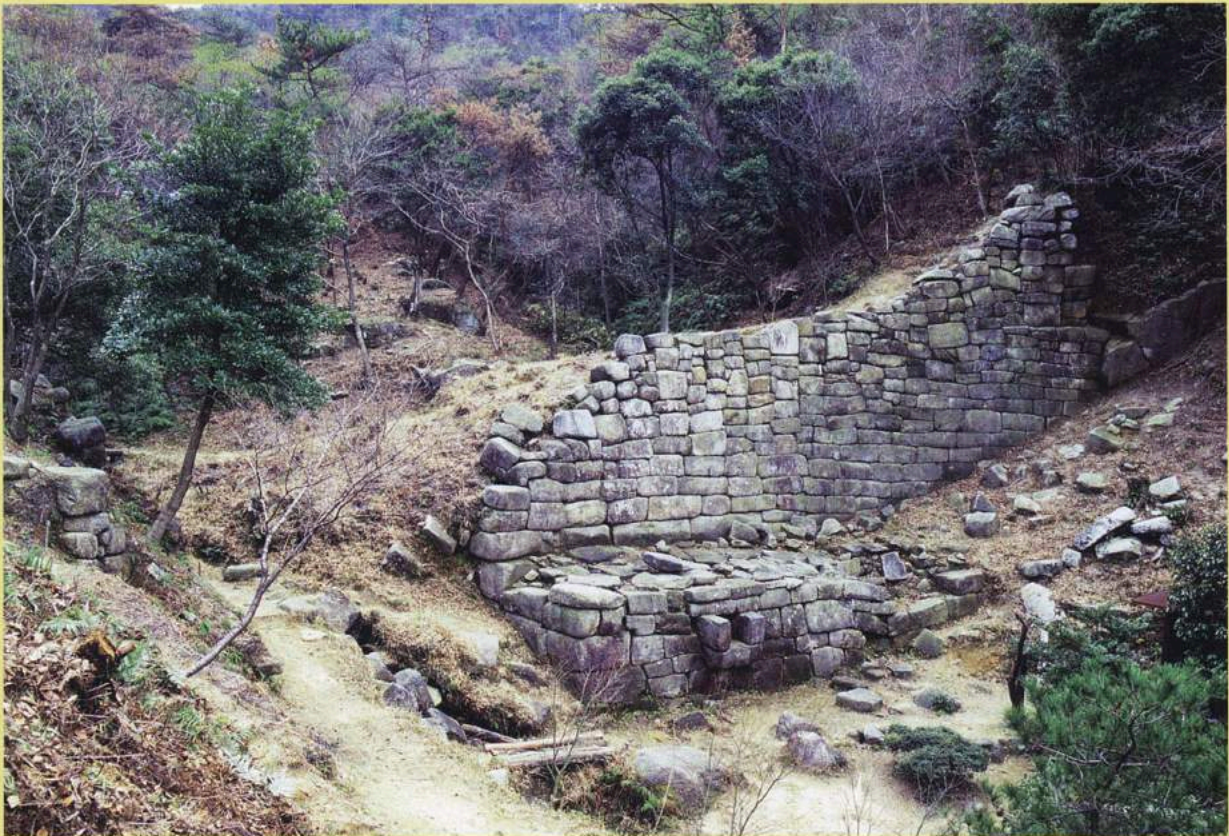


南東石塁（第二東門の東）

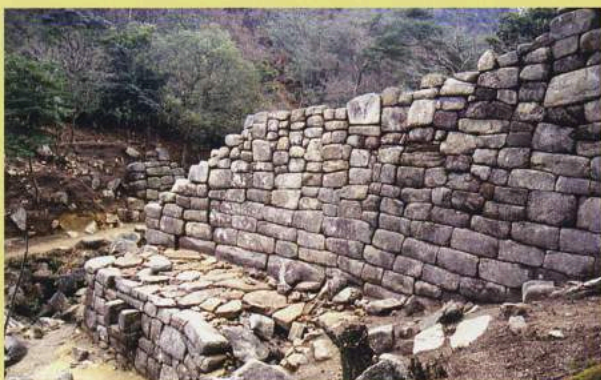
〔3〕 城門

中門

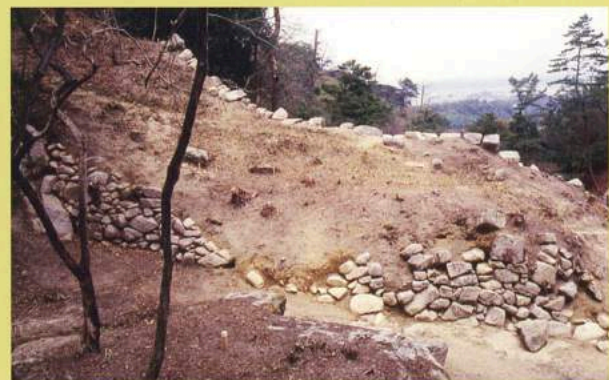
御所ヶ谷神籠石を代表する城門です。城内にある東側の大きな谷を 30mほど石塁でふさぎ、東側に城門を設けています。西側の城壁は二段に造られており（長さ 18m、幅 7 m、高さ上段 5 m、下段 2 m）下段には石樋（排水用暗渠）があります。城壁が二段に造られ、下段に排水用の暗渠が突出するのは、国内の古代山城では見られない珍しい構造です。



中門（北から）



中門（西から）



中門背面

門道の幅は 6 m もあり、防御的機能を有す「城門」と考えると幅が広すぎることから、おそらく建物の扉口が狭かったと考えられます。

中門から延びる土塁は「ハ」の字に城外側（北側）に張り出し、防御側が攻撃側に対して横方向からも攻撃できるよう設計されています。また城内と城外の比高差が大きく、城門に求められる防御機能を有効に発揮できる構造になっています。

西門

城内の西側の大きな谷を 40mほど石塁でふさいでいます。東側の城壁は残っていますが、西側は中央部が欠落しています。門道部は崩落が著しく、規模や構造は不明です。煉瓦^{れんが}のように石を積んだ中門とは異なり、重箱のように石を縦に重ねた積み方が目立ちます。

中門と同じように、城門の左右の土塁が城外側に「ハ」の字に張り出し、迫る敵兵に横方向からも攻撃できるように設計されています。



西門（北から）



西門 東石塁



西門 西石塁

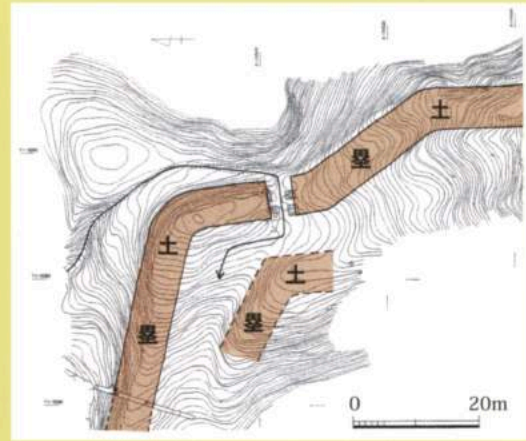
東門

中門から東に谷を1つ挟んだ尾根上にあります。北側の城壁だけが残っていましたが、発掘調査の結果、南側の城壁が崩れた状態で見つかりました。北側の城壁の高さは約4.5mで、門道の幅は3m余りに復元できます。

東門では城内に入ると正面にある土塁で行く手を遮断され、必然的に北に曲がらなければなりません。このように東門は、防御機能を有効に発揮できる構造になっています。



東門



東門周辺模式図

第二東門



第二東門全景

東門の南東 200mの尾根上にある城門です。両側壁は崩れていましたが、調査の結果、幅3.3m、長さ5.5mの門道が見つかりました。城門の建物の痕跡が確認されていないことから、建物のない城門であったと考えられます。ここから、7世紀後半頃の須恵器の長頸壺が出土しており、その頃に造られたと考えられます。



第二東門



須恵器 長頸壺



第二東門 列石

南門

神籠石の南の尾根に造られた城門です。城門を通り城内に入ると左から土塁が伸びており、必ず右に曲がらなければならない構造になっています。横方向から攻撃しやすくなっており、城門防御を意識して造られたと城門であることが考えられます。



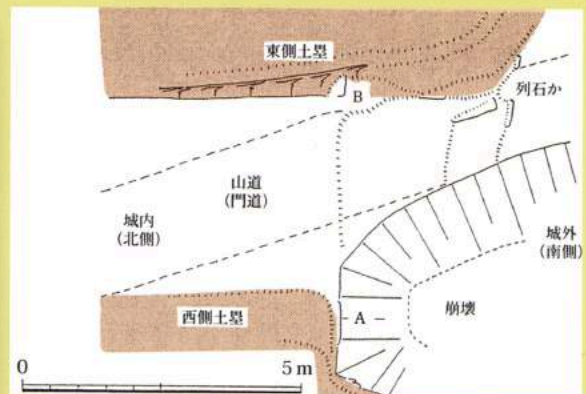
南門

第二南門

ホトギ山山頂より尾根沿いに西へ 370m 程行くと第二南門があります。門の正面は急な谷となり、当時の登城道もその谷筋にあったと考えられます。図の土塁の途切れた部分が門道と考えられ、現在は両側壁の石積みが残っています。



第二南門



第二南門周辺模式図

第二西門

第二西門は外郭線の北西部に位置し、なだらかな尾根先端にあります。正面の谷筋に登城道が想定できます。城内に入ると右から土塁がのびており、左に曲がらなければならない、攻め手は横方向から攻撃される構造になっています。城門背面には、やや広めの平坦面があることから、城門と一体となった施設を想定できます。



第二西門



第二西門 北側壁

〔4〕 建物・貯水池・石切場

礎石建物跡

城壁がめぐる四方の尾根を見渡せる城内のほぼ中央の尾根平坦地（標高 121m）に3間 × 4間の総柱建物の礎石がが残っています。その立地から望楼跡ぼうろうと考えられます。礎石には、神籠石の列石材が転用されています。

中央には景行天皇を祀る石祠むらかみぶつざんが建てられ、三面に村上仏山の漢詩が刻まれています。



景行神社と礎石建物跡



礎石建物跡

貯水池（馬立場）

礎石建物跡の西側の谷は通称「馬立場うまたてば」と呼ばれ、後背地に湿地を伴う石塁が残っています。以前は割石積みの石塁であることから御所ヶ谷の東にある中世の馬ヶ岳城に伴うものと考えられていましたが、中門の背面の石積みと似ており、石塁の後ろに広がる湿地などの状況から、古代山城に伴う貯水池であったと考えられます。写真に見えている土手は貯水池の堤です。

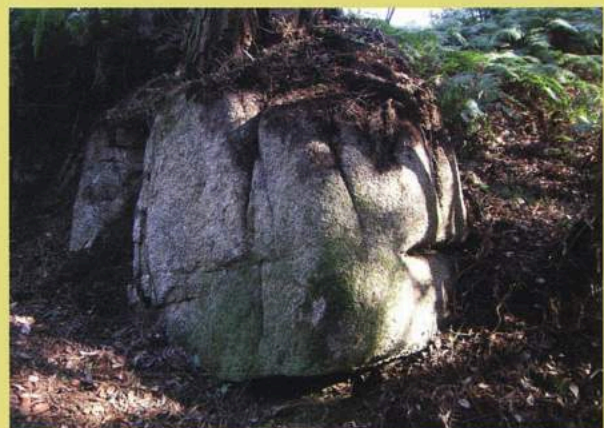
石切場

御所ヶ谷神籠石は山中で採れる真崎花崗岩を用いており、遺跡内の随所に石切場があったと考えられます。

中門の石材は城門背後の丘陵から切り出していますが、昨年度の分布調査で写真のような石を割るために掘られた溝の残る石材もみつけられました。



馬立場石塁



石切場

〔5〕 御所ヶ谷のその他の史跡

蔵詩巖

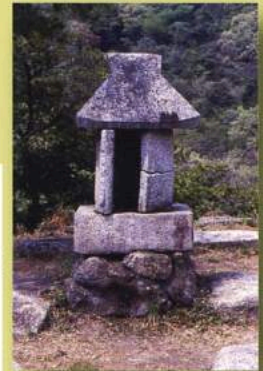
御所ヶ谷の中腹に高さ 2.5m、幅 3.5m、奥行 2.0mの「蔵詩巖」と刻まれた花崗岩があります。この巨石の下には、私塾「水哉園」を開いていた江戸時代の漢学者、村上仏山の漢詩集が納められているといわれています。岩の裏の銘文から 1876 年、仏山が亡くなる 2 年前に、門下生たちによって造られた碑であることがわかります。題字は守田房貫（蓑洲）によるものです。後世の人々に仏山の漢詩を読んでもらうために造ったといわれています。



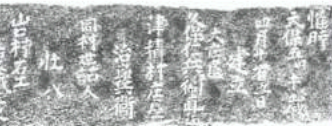
蔵詩巖

景行神社の石祠

景行神社の裏手、礎石建物跡の中央には景行天皇を祀る石祠が建てられており、村上仏山の漢詩が刻まれています。



石祠



祠に刻まれた漢詩の拓本

コラム 2 八十八ヶ所霊場

八十八ヶ所巡りは、室町時代末期～江戸時代初頭に四国地方で生まれた信仰です。真言宗の開祖、弘法大師（空海）と一緒に八十八ヶ所を巡るといふ修行の1つです。「八十八」というのは、八十八の煩惱の数に由来する説と、「米」の字を分解したものという説、男四十二、女三十三、子供十三の厄年を合わせたもの、という説があります。

御所ヶ谷にある八十八ヶ所霊場は、1949 年に下稗田の真言宗大吉寺が中心となって整備しました。八十八ヶ所の札所は、御所ヶ谷だけでなく、馬ヶ岳や今川地区にもあります。一番目の札所は御所ヶ谷神籠石の大師堂にあります。



第六十三番札所



御所ヶ谷の霊場

〔6〕 御所ヶ谷の自然

ヒモヅル

ヒモヅル (*Lycopodium casarinoides* Spring) は、南方系の植物で、日本では珍しい植物です。

1931年、中村茂^{なかむらしげる}、吉岡重夫^{よしおかしげお}によって発見され、1932年に京都大学の田代善太郎^{たしろぜんたろう}の調査により、ヒモヅルと判明しました。国内でも10ヶ所程しか（他には三重県・和歌山県・鹿児島県などで確認されています）自生しておらず、絶滅危惧種 I B 類に選定されています。

湿潤な土壌を好み、中門のある谷の溪流沿いに自生しており、アカマツやシャシャンボなど、付近の木にからみついて育ちます。

馬立場湿原

直径10m程の円形の湿原です。この湿原には、県内でも稀な種であるヒナノカンザシ、絶滅危惧種であるトキソウ、モウセンゴケ、サワギキョウ等、貴重な植物が多く見られます。馬立場湿原は御所ヶ谷神籠石の貯水池跡と考えられています。



ヒモヅル



馬立場湿原



ノハナショウブ



トキソウ



モウセンゴケ

御所ヶ谷住吉池公園

御所ヶ谷神籠石の麓に住吉池があります。御所ヶ谷からの水は住吉池に集められ、農業用水として活用され、長峽川まで流れます。

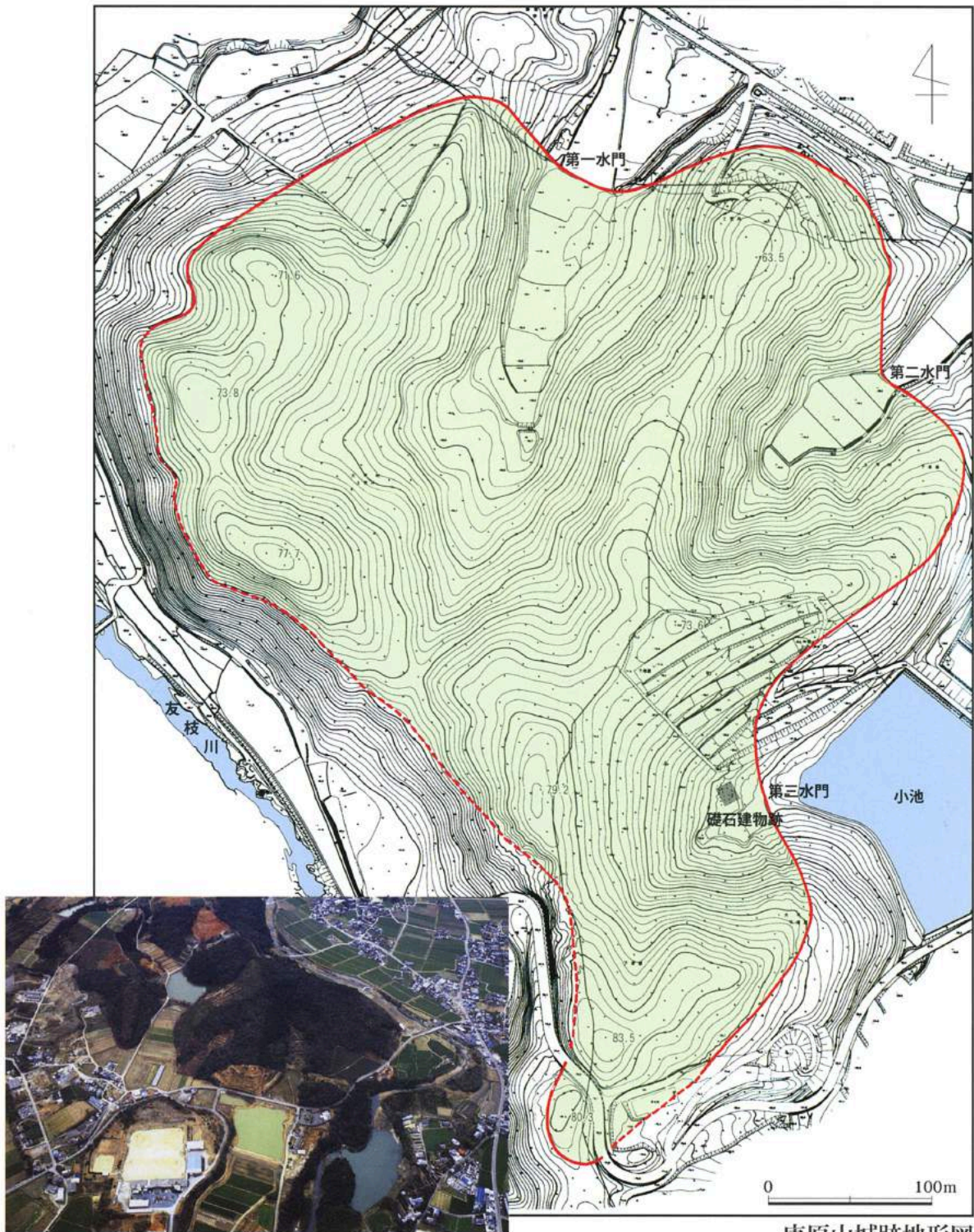
2001年に親水公園として整備され、池に浮かぶ遊歩道からは、四季折々の景色を楽しむことができます。



住吉池

唐原山城跡

唐原山城跡は、築上郡上毛町下唐原と土佐井の境にある、標高 76 ~ 83m の丘陵上にあります。1998 年に発見され、現地調査は 1999 ~ 2004 年にかけて行われました。御所ヶ谷神籠石と同じく、7 世紀に築造された山城跡と考えられます。



城壁

唐原山城跡全景

唐原山城跡地形図

城の外周は約 1.7 km と推定されています。城壁は御所ヶ谷神籠石と異なり版築工法は採用されておらず、単純な積み土によるものです。土塁は水門の近くにめぐらされています。水門がある場所は低位置な為、敵の攻撃が最も想定される場所でした。

水門

唐原山城跡には、水門が北から東側にかけて3ヶ所あります。ここでは調査の行われた第一水門と第三水門について紹介します。花崗岩はあまり使われておらず、安山岩系の石材が多く使用されています。

第一水門

平野に向かって開く標高 39mの谷部にあります。石列幅約 37m、谷奥までは距離 180mで最も大規模な水門です。東側の列石にはL字状の切欠が確認できます。



第一水門全景



第一水門（北から）



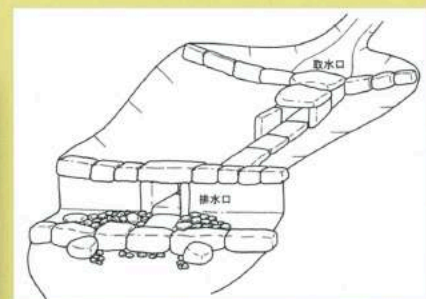
L字の切欠が残る列石

第三水門

遺跡の南西に位置する幅7mの水門です。この水門の下に暗渠（通水溝）があります。水門前面から、暗渠を出た水が流れる様子を想像すると、排水口を中心に放射状に石材が敷き詰められていることから、排水された水は石敷の表面を伝うように流れていたと考えられます。



第三水門全景（左が取水口）



第三水門復元模式図

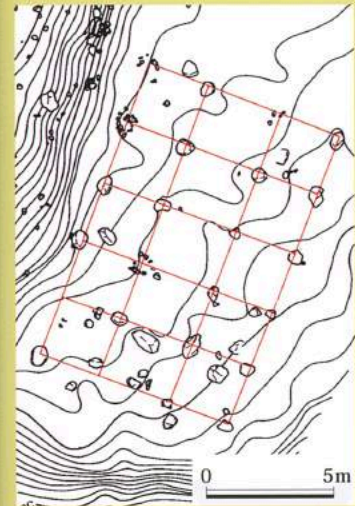


暗渠内部

礎石建物跡

第三水門のすぐ西に位置する、3間 × 5間の総柱礎石建物跡です。礎石の大きさは不揃いで、他の古代山城のものに比べて小振りです。

土塁の背後に位置し、第三水門前面の眺望に優れた位置にあるため、御所ヶ谷神籠石と同じように、望楼など防御に関連した建物であったと考えられます。



礎石建物跡

コラム3 中津城に運ばれた列石材

大分県中津市にある中津城は、1588年に黒田孝高よしたか（官兵衛）によって造られた城です。中津城の石垣を観察すると、部分的にL字状の切欠をもつ石材を使用していることが分かります。

唐原山城跡の列石が列を成しておらず、歯抜け状に点在しているのは、中津城築城時に運び出したためと考えられています。



中津城に見られる列石転用材の位置



歯抜け状に並ぶ列石



中津城の石垣（●は列石転用材）

神籠石が造られた時代とその背景

朝鮮式山城は7世紀半ばの東アジアをめぐる動乱の中で築城された山城であり、その築城時期も『日本書紀』の記事からも明らかです。これに対して神籠石系山城は、いつ頃、誰が、どのような目的で造ったか定かではありません。以前は弥生時代終末期(邪馬台国時代)の砦であるとか、筑紫君磐井が大和政権に対抗して築城したもの、などの説もありましたが、現在は朝鮮式山城と同様に、7世紀の対外的な緊張関係の中で築城されたという意見に集約されつつあります。ただその築城が、大野城や基肆城などの「天智紀」に登場する山城に先行するのか、後出するのかは学会でも大きな問題となっています。

先行説の多くは『日本書紀』の「斉明紀」4年(660年)「繕修城柵」記事を神籠石築城とします。百濟救援軍を率いた斉明天皇が築城したのが「神籠石」とする考えです。多くの神籠石は663年の白村江の戦い後に未完成で放棄され、一部は修築されて朝鮮式山城を補完するように并存したと考えられています。

一方の後出説は、立地や城壁の形態など個々の山城の形態差を地域性によるものとはせず、時期差と捉え、その目的も対外防衛的な色彩が薄れ、律令制化に伴う地域支配の拠点へと変化していったと考えています。

コラム4 神籠石と古代交通網

現在の国道に相当する「官道」が整備されたのは天武天皇の時代(7世紀後半)といわれます。九州では西海道と呼ばれ、「遠の朝廷」であった大宰府を中心に放射状に整備されました。

官道と神籠石(神籠石系山城)の位置を照らし合わせてみると、その大半が近くに接することが分かります。神籠石の築造理由が対外的な緊張によるものと考え、鹿毛馬神籠石(飯塚市)や杷木神籠石(朝倉市)など内陸にある神籠石はその役割を果たせないとの指摘もありましたが、実は古代において、神籠石は交通の重要拠点に位置していました。

当然のことながら陸上交通だけでなく海上交通も視野に入れ、烽火などの情報連絡手段を用いながら、個々の山城が機能していたことを考えないといけません。



古代山城と官道



御所ヶ谷神籠石山麓の官道跡
(大谷車堀遺跡)

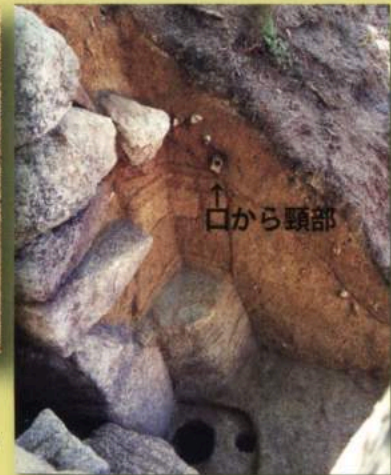
この論争を解決する1つの手がかりが出土遺物です。御所ヶ谷神籠石では第二東門から7世紀後半頃の須恵器長頸壺が出土しています (P.15)。口から頸の破片は土塁の崩落土中より、胴から底の破片は破碎した状態で門道床面から見つかりました。第二東門の機能していた時期を示すものと考えられています。神籠石系山城の鬼ノ城 (岡山県総社市) では、城内の調査で7世紀末頃を中心とする土器が大量に出土しています。ただ、出土遺物だけに発掘調査の進展を待たなければなりません。

2つ目は山城を構成する城壁や建物など構造物からの検討です。城壁では雉城 (張出しを持つ城壁) の有無、石材の加工具合、石積み技法など、建物では掘立柱構造や礎石立構造などの違いが挙げられます。朝鮮式山城の大野城 (太宰府市) では、太宰府口城門で掘立柱 (唐居敷 [掘立柱に添える門礎] をもつ) から礎石立への城門建物の変遷も確認されています。

いずれにしても、1つの神籠石 (神籠石系山城) の調査成果からすべての神籠石の築造年代を決めることはできません。それぞれの山城の調査データが蓄積されるなか、朝鮮式山城や日本の古代山城のルーツである朝鮮半島の山城との詳細な比較検討を進めることで、神籠石の築城された時代も次第に明らかになっていくことでしょう。



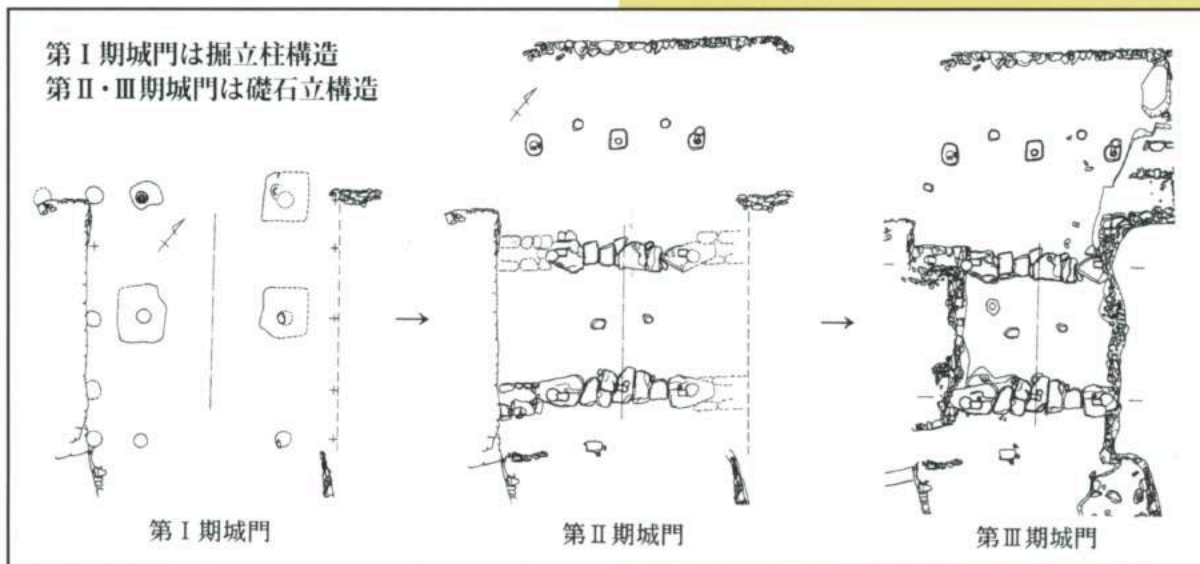
須恵器長頸壺 胴部から底部 (上)
頸部から口縁部 (右)



土器の出土状況 (御所ヶ谷神籠石第二東門)



金田城の雉城 (一ノ城戸)



大野城太宰府口城門の変遷

御所ヶ谷神籠石の今後

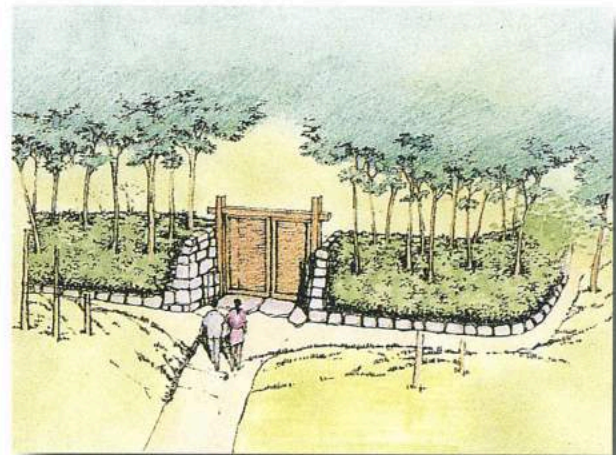
御所ヶ谷神籠石は 1908 年に考古学会で周知され、1953 年に国の指定史跡として登録されました。行橋市内唯一の国指定史跡です。行橋市では 1991 年の「第3次行橋市総合計画」の中で御所ヶ谷神籠石周辺の史跡自然公園化計画が持ち上がり、1993 年より発掘調査が開始されました。2008 年 9 月現在までに 11 次にわたる調査が行われ、城壁である土塁線をはじめ、東門、第二東門の 2ヶ所の城門跡、景行神社にある総柱礎石建物跡の調査が行われています。その過程で 1998 年には国史跡の追加指定が行われ、現在の指定面積は 444,475 m²にも及びます。

山城という遺跡の性格上、その全貌を明らかにすることは容易なことではありません。発掘調査もまず遺跡の範囲を決定することが優先され、土塁や城門など外郭線の調査が先行し、城内の調査はまだほとんど行われていないのが現状です。

今後は保存整備と並行しながらさらに総合的な調査を行う予定です。それによってまだ霞のかかったこの遺跡の姿もより鮮明になっていくものと期待されます。



中門（復元想定図）

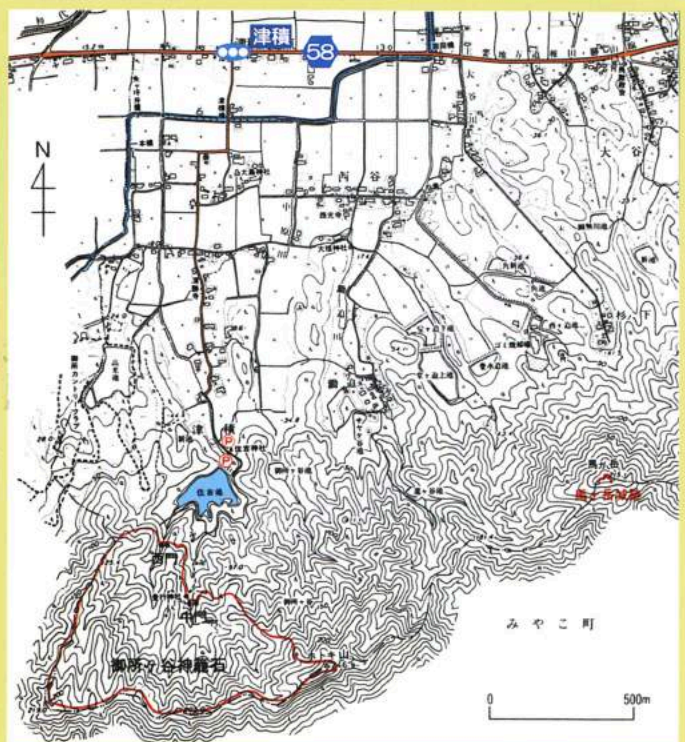


東門（復元想定図）

御所ヶ谷神籠石へのアクセス



- ・ J R 日豊本線「行橋駅」下車、車で 20 分
- ・ 平成筑豊鉄道「豊津駅」下車、車で 10 分
- ・ 太陽交通バス「津積」下車、徒歩約 30 分
- ・ 東九州自動車道「苅田北九州空港 I C」より車で 40 分



平成 20 年度特別展「激動の 7 世紀—御所ヶ谷とその時代—」出品目録

番号	資料名	出土地	数量	所有者
1	須恵器	橋塚古墳	6	みやこ町教育委員会
2	須恵器	穴ヶ葉山 1 号墳	7	上毛町教育委員会
3	ガラス玉	穴ヶ葉山 1 号墳	2	上毛町教育委員会
4	須恵器	福丸 3 号墳	2	行橋市教育委員会
5	土師器	福丸 3 号墳	5	行橋市教育委員会
6	耳環	福丸 3 号墳	3	行橋市教育委員会
7	琥珀製瓊玉	渡築紫 1 号墳	2	行橋市教育委員会
8	瑪瑙製丸玉	渡築紫 1 号墳	1	行橋市教育委員会
9	ガラス玉	渡築紫 1 号墳	8	行橋市教育委員会
10	須恵器	渡築紫 3 号墳	一括	行橋市教育委員会
11	ガラス玉	稲童豊後塚 A-1 号墳	6	行橋市教育委員会
12	須恵器	稲童豊後塚 A-10 号墳	一括	行橋市教育委員会
13	須恵器	稲童豊後塚 A-15 号墳	1	行橋市教育委員会
14	須恵器	袂水 1 号墳	一括	行橋市教育委員会
15	鉄鏃	袂水 1 号墳	8	行橋市教育委員会
16	鉄矛	袂水 1 号墳	1	行橋市教育委員会
17	鉄斧	袂水 1 号墳	1	行橋市教育委員会
18	紡錘車	袂水 1 号墳	1	行橋市教育委員会
19	刻書土器（「□奈」銘）	竹並 H-36 横穴墓	1	行橋市教育委員会
20	須恵器	黒部 6 号墳	一括	豊前市教育委員会
21	土師器	黒部 6 号墳	4	豊前市教育委員会
22	三累環頭柄頭	黒部山古墳	1	吉富町教育委員会
23	靱尻金具	黒部山古墳	1	吉富町教育委員会
24	百済系軒丸瓦	椿市廃寺	2	行橋市教育委員会
25	重弧文軒平瓦	椿市廃寺	1	行橋市教育委員会
26	須恵器	椿市廃寺	一括	行橋市教育委員会
27	土師器	椿市廃寺	一括	行橋市教育委員会
28	百済系軒丸瓦	上坂廃寺	1	行橋市教育委員会
29	重弧文軒平瓦	上坂廃寺	1	行橋市教育委員会
30	新羅系軒丸瓦	垂水廃寺	2	上毛町教育委員会
31	重弧文軒平瓦	垂水廃寺	1	上毛町教育委員会
32	新羅系軒平瓦	垂水廃寺	1	上毛町教育委員会
33	丸瓦（「□□四攸・□□五攸」銘）	垂水廃寺	1	上毛町教育委員会
34	塑像片	垂水廃寺	3	上毛町教育委員会
35	須恵器	荒堀中ノ原遺跡	一括	豊前市教育委員会
36	子持勾玉	荒堀中ノ原遺跡	3	豊前市教育委員会
37	白玉	荒堀中ノ原遺跡	1	豊前市教育委員会
38	製塩土器	垂水高木遺跡	2	上毛町教育委員会
39	新羅系軒平瓦	垂水高木遺跡	2	上毛町教育委員会
40	刀子	垂水高木遺跡	1	上毛町教育委員会
41	鉄鏃	垂水高木遺跡	1	上毛町教育委員会
42	須恵器	渡築紫遺跡 B 区	一括	行橋市教育委員会
43	土師器	渡築紫遺跡 B 区	一括	行橋市教育委員会
44	飯蛸壺	渡築紫遺跡 B 区	8	行橋市教育委員会
45	棒状土錘	渡築紫遺跡 C 区	3	行橋市教育委員会
46	子持勾玉	渡築紫遺跡 C 区	4	行橋市教育委員会
47	土製模造鏡	渡築紫遺跡 C 区	2	行橋市教育委員会
48	須恵器	稲童野稲迫遺跡	一括	行橋市教育委員会
49	土師器	稲童野稲迫遺跡	一括	行橋市教育委員会
50	製塩土器	稲童野稲迫遺跡	1	行橋市教育委員会

51	土鍾	稲童野稲迫遺跡	2	行橋市教育委員会
52	権	稲童野稲迫遺跡	2	行橋市教育委員会
53	鉄滓	稲童野稲迫遺跡	1	行橋市教育委員会
54	勾玉	代遺跡Ⅱ－c地区	3	行橋市教育委員会
55	土玉	代遺跡Ⅱ－c地区	4	行橋市教育委員会
56	百済系軒丸瓦	船迫窯跡群	1	築上町教育委員会
57	鴟尾瓦	船迫堂がへり2号窯跡	1	築上町教育委員会
58	須恵器	松丸F遺跡	1	築上町教育委員会
59	土師器	松丸F遺跡	1	築上町教育委員会
60	鞆羽口	松丸F遺跡	2	築上町教育委員会
61	鉄滓	松丸F遺跡	一括	築上町教育委員会
62	土師器	大谷車堀遺跡	1	行橋市教育委員会
63	『歴史地理』第15巻第3号(神籠石号)		1	行橋市教育委員会
64	『日本書紀』(寛文九年版本)		2	九州歴史資料館
65	墨書土器(「館」銘)	大野城跡	1	宇美町教育委員会
66	須恵器	大野城跡	1	宇美町教育委員会
67	土師器	大野城跡	1	宇美町教育委員会
68	百済系軒丸瓦	大野城跡	1	九州歴史資料館
69	大宰府系鬼瓦	大野城跡	1	九州歴史資料館
70	文様埴	大野城跡	1	宇美町教育委員会
71	鉄斧	大野城跡	1	九州歴史資料館
72	墨書土器(「大城」銘)	大宰府史跡	1	九州歴史資料館
73	百済系軒丸瓦(レプリカ)	基肄城跡	1	九州歴史資料館
74	百済系軒丸瓦(レプリカ)	基肄城跡	1	九州歴史資料館
75	須恵器	鞠智城跡	2	熊本県立装飾古墳館
76	土師器	鞠智城跡	2	熊本県立装飾古墳館
77	軒丸瓦	鞠智城跡	1	熊本県立装飾古墳館
78	平瓦	鞠智城跡	1	熊本県立装飾古墳館
79	木鍬	鞠智城跡	1	熊本県立装飾古墳館
80	須恵器	鹿毛馬神籠石	1	飯塚市教育委員会
81	木槌	鹿毛馬神籠石	1	飯塚市教育委員会
82	須恵器	御所ヶ谷神籠石	1	行橋市教育委員会
83	土師器	御所ヶ谷神籠石	2	行橋市教育委員会
84	景行神社石祠「拓本」	御所ヶ谷神籠石	一括	行橋市教育委員会
85	真崎花崗岩	御所ヶ岳(ホトギ山)	1	行橋市教育委員会
86	平尾花崗閃緑岩	杵尾山	1	行橋市教育委員会
87	須恵器	唐原山城跡	4	上毛町教育委員会
88	「太宰府全景」パネル		1	九州歴史資料館
89	「大野城跡」パネル		5	九州歴史資料館
90	「水城」パネル		5	九州歴史資料館
91	「基肄城」パネル		2	九州歴史資料館
92	「雷山神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
93	「杷木神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
94	「高良山神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
95	「女山神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
96	「帯隈山神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
97	「おつぼ山神籠石」パネル		1	九州歴史資料館
98	「公山城」パネル		1	九州歴史資料館
99	「扶蘇山城」パネル		1	九州歴史資料館
100	「扶餘羅城」パネル		1	九州歴史資料館
101	「聖興山城」パネル		1	九州歴史資料館
102	「三年山城」パネル		3	九州歴史資料館

参考文献

- 赤司善彦 2002 「筑紫の古代山城」『東アジアの古代文化』112号 大和書房
- 石田孝 1981 「神籠石は祭祀施設である」『筑紫』第91・93・94号 筑紫古代文化研究会
- 伊東尾四郎 1908 「豊前京都郡の神籠石及石門に就きて」『歴史地理』第11巻第5号 日本歴史地理学会
- 伊東尾四郎 1919 『京都郡誌』京都郡役所
- 小川秀樹 1995 「豊前・御所ヶ谷神籠石」『古代文化』第47巻第12号 古代学協会
- 小川秀樹 1998 「御所ヶ谷神籠石」『地域相研究』第26号 地域相研究会
- 小川秀樹 2001 「豊前中津城石垣にみえる神籠石石材について」『溝漕』第9・10合併号 古代山城研究会
- 小田富士雄編 1983 『北九州瀬戸内の古代山城』（日本城郭史研究叢書10）名著出版
- 小田富士雄監修 2005 『別冊太陽 古代九州』平凡社
- 勝山町史編纂委員会 2006 『勝山町史 上巻』勝山町
- 亀田修一 1987 「豊前の古代寺院跡」『東アジアの考古と歴史 下』（岡崎敬先生退官記念論集）同朋社
- 亀田修一 2006 『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 九州国立博物館 2006 『日韓の古代山城を掘る』（九州国立博物館国際シンポジウム）
- 小林庄次郎 1898 「筑後国高良山中の『神籠石』なるものに就て」『東京人類学会雑誌』第153号 東京人類学会
- 犀川町誌編集委員会 1994 『犀川町誌』犀川町
- 椎田町史編纂委員会 2005 『椎田町史 上巻』椎田町
- 下原幸裕 2006 『西日本の終末期古墳』中国書店
- 新吉富村誌編集室 1990 『新吉富村誌』新吉富村
- 大平村誌編集委員会 1986 『大平村誌』大平村
- 大平村教育委員会 2003 『唐原神籠石Ⅰ』（大平村文化財調査報告書第13集）
- 大平村教育委員会 2005 『唐原山城跡Ⅱ』（大平村文化財調査報告書第16集）
- 築城町誌編集委員会 2006 『築城町誌 上巻』築城町
- 豊津町史編纂委員会 1998 『豊津町史 上巻』豊津町
- 豊津町歴史民俗資料館 2002 『古代豊前国への道』
- 福岡県教育委員会 1991 『大野城跡Ⅶ 太宰府口城門跡発掘調査概報』
- 豊前市史編纂委員会 1993 『豊前市史 考古資料』豊前市
- 宮崎榮雅 1910 「豊前国御所ヶ谷神籠石探検記」『歴史地理』第15巻第3号 日本歴史地理学会
- 向井一雄 1991 「西日本の古代山城遺跡—類型化と編年についての試論—」『古代学研究』第125号 古代学研究会
- 向井一雄 1992 「御所ヶ谷山城新発見遺構について—新たに発見された二つの城門跡—」『溝漕』第2号 古代山城研究会
- 向井一雄 2001 『古代山城研究の動向と課題』『溝漕』第9・10合併号 古代山城研究会
- 村上利男・半田隆夫監修 2006 『図説 田川・京築の歴史』郷土出版社
- 行橋市教育委員会 1993 『史跡 御所ヶ谷神籠石保存管理計画策定報告書』（行橋市文化財調査報告書第21集）
- 行橋市教育委員会 1994 『文化財を活用したまちづくり基本構想』
- 行橋市教育委員会 1998 『史跡 御所ヶ谷神籠石』（行橋市文化財調査報告書第26集）
- 行橋市教育委員会 2006 『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ』（行橋市文化財調査報告書第33集）
- 行橋市史編纂委員会 2004 『行橋市史 上巻』行橋市
- 行橋市史編纂委員会 2006 『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市
- 行橋市歴史資料館 2007 『古墳から寺院へ—椿市廃寺とその時代—』行橋市教育委員会
- 吉武芳彦 1988 「犀川町の神籠石について」『郷土誌さいがわ』第6号 犀川町郷土誌研究会
- 吉村武彦編 2008 『大化の改新と古代国家誕生』（別冊歴史読本11）新人物往来社

後記

特別展「激動の7世紀—御所ヶ谷神籠石とその時代—」の開催にあたりましては次の機関、方々よりご協力いただきました。記して感謝の意を表します。(敬称略、50音順)

飯塚市教育委員会 宇美町教育委員会 九州歴史資料館 熊本県立装飾古墳館
久留米市教育委員会 上毛町教育委員会 佐賀市教育委員会 総社市教育委員会
築上町教育委員会 対馬市教育委員会 光市教育委員会 肥後古代の森協議会
福岡県教育委員会 豊前市教育委員会 みやこ町教育委員会 吉富町教育委員会
赤司善彦 井上信隆 今村元一 浦井直幸 瓜生秀文 大庭孝夫 太田隆一 小田和利
小田富士雄 加藤和歳 亀田修一 辛嶋眞治 川本英紀 河原 剛 木村達美 酒井芳司
坂梨祐子 佐藤 信 下原幸裕 末永浩一 須原 緑 高尾栄市 田中淳也 棚田昭仁
長嶺正秀 西谷 正 野村憲一 畑中健一 浜田信也 平尾和久 馬田弘稔 松尾尚哉
松尾洋平 丸林禎彦 向井一雄 矢野和昭 山本幸輝 吉田東明

(写真・図版提供)

瓜生秀文 雷山神籠石 (P.8) 畑中健一 ノハナショウブ・トキソウ・モウセンゴケ (P.19)
九州歴史資料館 太宰府全景・大野城跡 (P.7)
久留米市教育委員会 高良大社 (P.6)・高良山神籠石 (P.8)
上毛町教育委員会 穴ヶ葉山古墳群 (P.2)・垂水廃寺 (P.4)・唐原山城跡 (P.20～22)
佐賀市教育委員会 帯隈山神籠石 (P.6) 総社市教育委員会 鬼ノ城 (P.8)
対馬市教育委員会 金田城跡 (P.7)
築上町教育委員会 船迫窯跡群・松丸F遺跡 (P.5)
光市教育委員会 石城山神籠石 (P.6・8) 肥後古代の森協議会 鞠智城跡 (P.7)
福岡県教育委員会 石堂中後ヶ谷古墳群 (P.3) みやこ町教育委員会 御手水原古墳群 (P.3)

(図版出典)

古代山城関連記事 (P.7) 九州国立博物館編 2006 より転載
中津城にみられる列石転用材の位置 (P.22) 小川 2001 を改変
古代山城と官道 (P.23) 九州国立博物館編 2006 を改変
大野城太宰府口城門の変遷 (P.24) 福岡県教育委員会 1991 より転載

平成20年度特別展

激動の7世紀

—御所ヶ谷神籠石とその時代—

編集 行橋市歴史資料館
〒824-0005
福岡県行橋市中央1-9-3
TEL 0930-25-3133
FAX 0930-25-3138

発行 行橋市教育委員会
〒824-8601
福岡県行橋市中央1-1-1
TEL 0930-25-1111
FAX 0930-25-1582

発行日 平成20年9月17日

印刷 株式会社 文信堂印刷所

